

アルテミス 「弥生の木の下で」

多谷 昇太

桜の木をなんと見る？

ぴーんと冷たく張りつめた弥生の空気の中で、
枝じゆうそこかしこに

芽をふくらませているやつをさ。

あいつは欲情しているんだ。

いまだ寒空のもと人間たちは襟を立てて、

小さく縮こまっているというのに、

なんて太いやつだ。

やがて咲く絢爛豪華な桜花と云ってはお高くとまりや

がって、芽吹く寸前のおまえの姿は、欲情に乳首を張

らせた人間の女のようにだ。

スーツとタイトスカートで身を包み、

わたしは貞淑な女でございとばかり、

ハイヒールのスタッカートを道に鳴らして行く、

世の法度に面従腹背な、そんな女。

老いぼれた冬の、弥生の冷たい空気に合わせて、

花一つ、葉一枚さえつけていない、

今は、今だけは、一見つつましやかな桜の木…

嘘、嘘。

やがて春の嵐が吹きすさべばたちまちのうちに、
内から噴出するマグマのように、生命の火、情欲の本
流を、おまえはほとばしらせることだろうよ。

もはや隠しようもなく、淫らなピンクの花々を、
枝中いっぱい咲かせることだろう。

咲き誇ったその木の下からは亡者たちの呻き声が、ま
た嘆声が伝わって来ようとも、そんなものは歯牙にも

かけず、吹く春風に狩猟のラッパを鳴り響かせては、
花の寓意たる女神、アルテミスよ、

おまえは本性をあらわすのだ…

純潔と貞淑を奉じながら同時に愛欲と多産をつかさど
り、ヘレーナーの美と愛を示しながらも、猛勇の女神

アテネのごとく、狩猟と戦いに明け暮れる。

豪勇の猟師オリオンをこよなく愛し、

棍棒もて野獣を一撃で撃ち殺す、その剛腕に頬をすり

寄せては愛無したという、汝アルテミス、

おまえこそは人の世そのものだ。

愛情と戦争、貞淑の法度と本能のみだら、いづくし
と残酷さ、それらの矛盾と不条理を体現して憚りもし

ない。

狩猟の名に託した物欲と競争のすさまじさ、またその限りなさ。生殖のためには強い男をひたすら愛するその性と云い、アルテミスよ、おまえの総身もて人の世の寓意と云えるだろう。

おまえに狩られて殺された過去無数の人間たちが、おまえの根元で怨嗟の呪いをあげようと、

かえってそれを肥やしにして、なおいつその花々を咲かせ枝を茂らせる、それがおまえだ、世の中だ。

アルテミスよ、かつておまえが守護しながら滅ぼされたトロイア、またみずから殺めてしまった愛人オリオン。彼らのために流したというおまえのその涙が、願わくは、万国万人のために流されるよう、俺は祈っているぜ：

春、夏、秋が過ぎ、冬となり、すっかり俺も老人となつてしまった。今はおまえに焦がれる空しさを知り、またおまえの仮でしかない、幾度もの容姿のうつろいと入滅を見て来た。しかし次の春、また次の転生に、都度おまえはよみがえり、美しさを誇っては、性懲りもなく数多の人をして狩り、狩らせるのだろう。その都度魅惑され翻弄され続ける俺たちも馬鹿だが、しか

しアルテミス、それほどのおまえであるということだ
：

満開の桜の木の下で、すっかり老いぼれた冬、老人となつてしまった俺は、しかし云う。

「おお、美しい。おお、美しい…」と痴れ者のようにひとつつことを。今はおまえの実体を知ってはいても、やはり咲いたおまえの前で、春を取りもどした世の中の前で、これを愛せずにはおれないのだ：



アルテミス像

アルテミス [弥生の木の下で]

